

継子譚としてみた『落窪物語』の特質

——『住吉物語』・『小夜衣』・『秋月物語』との比較から——

渡 邊 桂 子

はじめに

『落窪物語』は、平安時代前期の物語文学の中で異彩を放っている。『枕草子』以前の成立^(注1)であるのに、リアリティックな描写で、様々な場面が早いテンポで展開し繰り広げられ、滑稽味を持ち、これほど楽しく読める古典文学は他に見あたらない。このような多くの魅力を持つ『落窪物語』は、話型の面から言えば、継子虐め譚と恋愛譚とを兼ね備えた物語であると言える。

その中で継子虐め譚（以下継子譚と略称する）は、『源氏物語』〈蜩〉にも「継母の腹きたなき昔物語も多かるを」^(注2)とあって、『住吉物語』以外にも今は散逸してしまった継子譚は複数あったものと思われる。

そこで、本稿では、『落窪物語』を継子譚として捉え、『住吉物語』・『小夜衣』・『秋月物語』といった他の継子譚と比較する事で、『落窪物語』の、他三作品との共通点と独自性とを探索し、時代を経ていく中でその影響力を窺うこととした。この比較考察により、少しでも『落窪物語』の特質を明らかにしたい。

四作品を比較するにあたって、二物語間ごとの共通性・類似性を単位としてパターン印をつける。

『落窪物語』 Ⅱ 『住吉物語』 … A 『落窪物語』 Ⅱ 『小夜衣』 … B

『落窪物語』 Ⅱ 『秋月物語』 … C 『住吉物語』 Ⅱ 『小夜衣』 … D

『住吉物語』 Ⅱ 『秋月物語』 … E 『小夜衣』 Ⅱ 『秋月物語』 … F

これらの組み合わせによって、四作品すべての類似度を比較できる。例えば、『落窪物語』 Ⅱ 『住吉物語』 Ⅱ 『秋月物語』 という場合は、A・C・Eと判定する。

また、表現の仕方について触れておく。父や母、継母といった家族間の呼称は姫君（継子・主人公）から見ての呼称である。

四作品の本文は、次のテキストに依った。

・ 『落窪物語』の本文は、『日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』^(注3)。

・ 『住吉物語』の本文は、『中世王朝物語全集 零ににころ 住吉物語』^(注4)。

・ 『小夜衣』の本文は、『中世王朝物語全集 小夜衣』^(注5)。

・ 『秋月物語』の本文は、『室町時代物語大成 第二』所収、高山歎喜寺本による。^(注6)

一、四作品の比較

物語の展開にそい、人物・出来事などの要素に分けて、順次比較考察を行う。

(一) 父の官職について 『落窪物語』（以下『落』）は中納言。『住吉物語』（以下『住』）は中納言兼左衛門督。

『小夜衣』（以下『小』）は按察使大納言。『秋月物語』（以下『秋』）は大納言。ここで注意したいことがある。

一見するとAとFのように思われるが、時代が下るにつれて官職の地位の實質の高さは低くなる。鎌倉時代や室町時代の大納言は、平安時代の中納言と同等程度の地位の高さであったろうと推測されるので、この四作品の父の官職は類似と解釈する。∴A、B、C、D、E、F

(二) 母の出自について 『落』は皇族。『住』は古い帝の女。『小』は母の出自に関する表記が見られない。『秋』は源中納言の妹君。∴A

(三) 継母の出自について 『落』は出自に関する表記が見られずはつきりしない。『住』は諸大夫の女。『小』は詳しくはわからない。『秋』は法勝寺を先祖にし、左大將を父に持つ。出自が表記されているかどうかで判断する。
∴BとE

(四) 継母実子について 『落』は景純、二郎、景政、大君、中君、三の君、四の君という男女の子がいる。『住』は中の君、三の君という女の子しかない。『小』は梅壺（継母実子の他の呼び名は姫君としか表記されていないためこのような表記にする）という女の子が一人しかない。『秋』は愛子の君という女の子が一人いる。∴F
ただし女の子しかないという点ではD、Eも加えることができる。

(五) 男君の官職について 『落』は右近少將（臣下）。『住』は四位の少將（臣下）。『小』は兵部卿宮（皇族）。『秋』は式位の中將（臣下）。先に述べたように官職の實質的地位の高さは時代によって変化するものなので、官職そのものにはこだわらないことにする。つまり『小』のみが皇族の身分であり、他三作品は臣下の身分で近衛府の役人ゆえ類似とする。∴A、C、E

(六) 男君の父の官職について 『落』は左大將。『住』は右大臣。『小』は冷泉院。『秋』は関白。∴該当なし

ただし、右大臣が大將を兼任することもあり、身分的には類似とも言えるが、厳密に判定した。

(七) 母が死亡した時の姫君の年齢表記について 『落』は姫君が幼い頃としかわからない。『住』・『小』・『秋』

は年齢が明記されている。∴ D、E、F (ただし、姫君の年齢はそれぞれ異なる。『住』は姫君が八歳の時。『小』は姫君が五歳ぐらいの時。『秋』は姫君が七歳の時。)

(八) 男君が姫君の存在を知るときかけについて 『落』は帯刀(従者)から姫君の話を聞いたことによる。『住』は当代の男女の評判をしている時に筑前(女房)が姫君のことを話していたのを聞いたことによる。『小』は年嵩の女房たちが女性のことを評しているのを聞いた際に姫君のことを知る。『秋』は太秦へ行った時に姫君の姿を直接垣間見ることので心惹かれる。『落』は女房からではないが、人伝えという形で姫君の存在を知り、姫君に興味を抱くという点で『住』・『小』に類似とする。∴ A、B、D

(九) 姫君の住居を決定した人物について(継母の仕打Ⅰ) 『落』は継母が寝殿の放出のその先にある一室の床の落ち窪んだ二間の部屋に姫君を住まわすことを決定する。『住』は父が乳母とともに住んでいた姫君の将来を案じて、姫君が十一歳の時に父邸の西の対に姫君を住まわすことを決定する。『小』は姫君を祖母(尼)の許に預けたが、年月が経て姫君の美しく成長した姿を見た父が、姫君の母の姿を思い出して姫君の将来を案じ、都に迎え入れることを決定する(継母は女房に適当な人物がいなしと思っていた矢先だったので、姫君が都に戻ることを喜ぶ)。『秋』は父が姫君の住まいとして月見の御所を整え住まわすことを決定する。∴ D、E、F

また、父と同じ邸内で暮らしていたかどうかでも判断する。∴ CとD

(十) 姫君の利用について(継母の仕打Ⅱ) 『落』は継母が買った鏡に似合うからと姫君の鏡箱を奪った代わりに所々はげた鏡箱を与えたり、継母実子の婿取りの時に修理をするという名目で様々な道具を取り上げたり、継母

実子の婚の衣装を縫わせるなどの労働を強いる。『住』・『小』・『秋』にそのような調度品強奪や強制労働という面は見られない。しかし『小』は姫君の才能の利用として継母実子が入内する際に気の進まない姫君を後見役として利用する。∴D、E、F

(二一) 男君の縁談について 『落』は継母実子(四の君)との縁談が持ち上がる。『住』は騙されて継母実子(三の君)と結婚する。『小』は関白の娘と結婚する。『秋』は騙されて継母実子(愛子の君)と結婚する。∴A、B、C、D、E、F

(二二) (二一) に対する姫君の反応について 『落』は気にかけた様子を見せるが、平静なふりを装う。(外に感情を出さない) 『住』は世間に見苦しい評判が立つといけなうと言って、前にも増して男君の文に返事をすることを固辞する。『小』は言葉で悲しみを表現しないものの涙を流すという形で悲しみの感情を外に出す。また、祖母の嘆きの原因となっていることを悲しむ。『秋』はもとから男君に関心を示してはいない。∴E

(二三) 継母の讒言について (継母の仕打Ⅲ) 『落』は常刀が姫君の恋人だと父に嘘を言う。『住』は六角堂の卑しい法師が姫君の許に通っていると嘘を吐く。『小』は姫君失踪後、御所に出入りしている「あるまじき人」が姫君を盗み出したのだろうと言う。『秋』はみすばらしい法師が通っていると父に嘘を吐く。四作品とも姫君の許に通っている者として法師や身分の低い男の存在を匂わす。∴A、B、C、D、E、F

(二四) (二三) に対する父の反応について 『落』は身分の低い者が相手という事を情けなく思い、継母の提案通りに姫君を閉じ込める。『住』は継母の企み通りに姫君の許に法師が通っているところを見て情けなく思い、姫君の入内を諦め、宰相兼左兵衛督との結婚を決める。『小』は都に迎えたことを後悔し、悲しみ涙する。『秋』は姫君の入内をあきらめる。∴E

(一五) 姫君の幽閉について (継母の仕打Ⅳ) 『落』は継母が姫君と男君を別れさせるために幽閉をする。『住』は姫君が己の運命を悲観し、住吉の尼を頼るという侍従の案を受け入れて行動に移す。『小』は継母実子付きの女房が帝と姫君の仲をあやしみ、継母に進言したところ、継母は継母実子の邪魔になるだろうと民部少輔夫妻邸に姫君を預けて監視をさせる。その後、姫君は父に助けられ山里に移る。『秋』は継母実子の幸せな結婚生活に姫君の存在は妨げになると判断した継母は、姫君を都から離れた遠い島に流すことを決める。ここで一つ付け足したい。『落』のみ幽閉先は継母と同じ邸内ではあるが、姫君の閉じ込められた所が変な匂いのする雑舎ということで、華やかな都の雰囲気からかけ離れた所、異空間に移されるという点からこの四作品は類似する。…A、B、C、D、E、F

(一六) 結婚に関するいじめについて (継母の仕打Ⅴ) 『落』は継母が姫君と年老いた者 (典薬助) との結婚を謀る。『住』は継母が姫君と年老いた者 (主計頭) との結婚を企てる。『小』は民部少輔が姫君の姿を直接垣間見て心惹かれる。ここに継母の介入はない。『秋』は父が近衛中将と結婚したのだと勘違いをして、姫君と近衛中将との結婚話を進めようとする。…A

(一七) (一六) に対する姫君の反応について 『落』は病氣と偽ったり、戸を頑丈に閉めているうちに典薬助の失敗で難を逃れたりと、急ごしらえ、その場逃れのような逃げ方をする。『住』は故母宮の乳母である住吉の尼を頼ろうと、完全に逃げる態勢を作る。『小』は気味悪く思い、いよいよ落ち込む。『秋』は父が誤解をしていることに対する姫君の感情表記がないので、そのことを知っていたかどうかともわからない。逃げようという姿勢を見せることで判断する。…A

(一八) 姫君が普段の部屋から姿を隠した時の男君の反応について 『落』は歎き悲しみ、継母を殺したいほど憎ら

しく感じつつも姫君の気持ち信じ、姫君を救出するために積極的に行動する。『住』は悲しみに暮れ、山々寺々に参詣をしては姫君の行方を知らせ給えと祈願する。『小』は「もし、忍ぶ人などやおはしけん」と姫君の気持ちを疑い、姫君を諦めなければならぬことを悲しむ。また、姫君の祖母である尼の許を訪れて悲しみを分かとうといった消極的な反応をする。『秋』は物思いに沈んで臥せり、また清水に参詣して祈りを捧げる。…E

(一九) 神仏の加護について 『落』に神仏の加護はない。^(注)『住』は男君が秋に初瀬に赴いた際に「わたつ海のそことも知らで侘びぬれば住吉とこそ海人は言ふなれ」と夢のお告げで姫君の行方を知る。『小』は乳母が様々な神社・仏閣に姫君発見の願を立て、験力があると評判の所で「つひには逢ふべきよし」を占ってもらう。『秋』は男君が姫君の行方を知るために清水寺に参詣した結果「君かいふ、人はこれより、にしにあり、心つくしに、ゆきてたつねよ」と夢のお告げを得て姫君の行方を知る。…E

ただし、姫君の無事を知らせるお告げがあったということだけを見れば、D、Fも含む。

(二十) 男君の旅の苦勞について 『落』は男君が姫君を救出する際に、都にある父(中納言)邸に行くため旅をしない。『住』は旅をする。この時、男君は足から血を流すほど歩き、姫君に会う事ができる。『小』の男君は姫君を救出するための旅には出ない。『秋』は姫君を捜すため筑紫まで旅をする。男君は慣れない旅に足から血を流してまで歩いた末、姫君に会う事ができる。…E

(二一) 姫君がいなくなった時の態度(継母) 『落』の継母はいまいます。これは、姫君を継母実子の召使として邸で縫い物をさせることができなくなるのは困るため、姫君に決して夫を持たせたくないと思っていたことから、この感情が継母の中で起きた事がわかる。『住』は内心では喜ぶものの、父(中納言)の手前、具合が悪いと、涙も落ちないのに泣くふりをする。『小』はしてやったりと喜ぶが、この先の姫君の処置に頭を悩ます。

『秋』は計画どおりに姫君がさらわれる場面を見ると肝をつぶす。姫君がいなくなったことに対して喜びを示すかどうかという点で判断する。∴D

(二二) 姫君がいなくなった時の態度(父) 『落』は中納言という身分である者の屋敷の奥深く、寝所に真昼間から入り込んで、乱暴狼藉をして出て行く者があつた事をくやしがり、うろたえる。また、家人が誰もその事に気付きもしなかつた事に腹を立てる。『住』の父は姫君がいなくなった事を知ると、あきれ騒ぎ嘆き悲しむ様子がこの上ないほどになる。継母が「さまでいたくな嘆き給ひそ」と言うのと、「多くの子の中に、誰かはこの君ほどに思ふべき。わが身にも代へまほしく」と涙を流す。『小』は姫君失踪を知り、京に迎えた事を後悔し、ほんやりとした気分で思い乱れ、悲しむ。尼上に何も言えないと深く落ち込む。『秋』はひどく泣き、様々な方向に早馬を出して姫君を捜させる。姫君の心配をしているかどうかで判断する。∴D、E、F

(二三) 姫君と男君の再会について 『落』は父(中納言)一家が祭見物に出かけている時に、男君が閉じ込められた姫君を救出して再会を果たす。『住』は琴の音色に惹かれて向かつた先に姫君の声を聞く。姫君はすぐに男君に会わず、尼が二人を再会させる。『小』は宰相の君から姫君の無事を知らされ、山里に赴いて再会する。『秋』は中将の奏でる笛の音と姫君の奏でる琴の音でお互いがその存在に気付く。二人の音色に疑問を持った尼によって再会をする。再会するきっかけとなる場面に音色が奏でられていること、尼によって再会を果たす点で判断する。∴E

(二四) 父や継母が姫君生存を断定できたきっかけについて 『落』は継母が与えた鏡箱と鏡箱に添えられた姫君の文。『住』は父が与えた小桂とそれ以前に父へ届けられた姫君の文。『小』は宰相の君宛の姫君の文。『秋』は秋月から都に戻る時に書いた姫君の文。全て文の存在という点で類似する。∴A、B、C、D、E、F

文以外に箱や小桂が存在するかどうかから判断する。…AとF

また、姫君生存を打ち明けられる状況になるまでに長い年月が経過している点で判断する。…A

(二五) 真実が明るみに出た時の反応〈継母〉 『落』は姫君の文を鏡箱の中に見付けた継母は驚いて目も口も開いたままになり、世間並みの表現では言い表せないほどひどく腹を立てる。また、太郎景純から責めたてられ、「憎くおぼえしままにせしぞかし」と開き直る。『住』は父から姫君生存の話の打ち明けられた継母は口を開け、目をぱちぱちさせ顔を赤らめて、何も弁解できずにそわそわするばかりである。『小』は悪評が世間に知れ渡る事を堪え難く思い、殺しておけばよかったと後悔しつつも、報告に來た民部少輔を慰める。『秋』は父から姫君生存の話の打ち明けられた継母はとりわけ顔色を失う。開き直りを見せるか、現状に驚きあきれるのみで何もできないでいるかで判断する。…E

(二六) 真実が明るみに出た時の反応〈父〉 『落』は邸を取られ、ひどい仇敵だと思つた事も、自分の子がした事だと思つたと悪行とも思えず、前々から受けた恥辱も忘れて、どうして疎かに思つていたのだらうと感じる。また自分の人望が衰え、人からもばかにされているのを嘆いていたので、姫君が名門の男君と結婚している事を面目ある事とたいそう嬉しく思う。『住』は姫君の姿を見ると気も失わんばかりになり、姫君に会えた事をたいへん喜び、いい加減に思つていなかった事を告げる。『小』は地獄で地藏菩薩を発見した罪人の気持ちに例えるほど、喜びを感じる。『秋』は「春日のはからい」と喜び、涙を流す。姫君生存に自身の名誉までを考えているか、ただ純粹に喜びを示しているかで判断する。…D、E、F

(二七) 真実が明るみに出た時の反応〈継母実子〉 『落』は太郎景純・三郎景政は継母の諸行を歎き批判する。三の君は自分の夫を奪つた一族なので、近い関係となつて前夫の噂を伝え聞くことをいまいましく思う。四の君は

男君が自分を騙して情けない身の上にしたため、三条邸の人々に会うのをつらく思う。『住』は親であるのを厭わしく思う。人が遠ざかるのも当然だと声を上げて泣く。『小』は継母が姫君に行った仕打ちを嘆く。『秋』は継母の姫君への仕打ちを歎く。『落』の継母実子の太郎景純・三郎景政は異性のためここでは除いて考える。：D、E、F

(二八) 姫君の住居について(救出後の姫君Ⅰ) 『落』は二条の御殿(男君の許)。『住』は四位の少将の邸(男君の許)。『小』は兵部卿宮の許。『秋』は大宮(男君の許)。：A、B、C、D、E、F

(二九) 姫君の子どもについて(救出後の姫君Ⅱ) 『落』は太郎、二郎、三郎、大君(女御・后、中の君、三の君、四の君の計七人で継母の産んだ男女数に一致。『住』は若君(後に三位の中将)、姫君(後に女御)。『小』は若君(一の宮)、姫君(後に東宮女御)、大勢の若君・姫君。『秋』は若君三人(後に特に優れた公達)、姫君二人(後に后)。四作品とも男女の子を産み、その子どもたちが出世を果たすという点で類似する。：A、B、C、D、E、F(ただし、継母と同数の子どもを産むという点、姫君の産んだ子どもの人数そのものを見ると該当なしとなる。)

(三十) 男君の出世について(救出後の姫君Ⅲ) 『落』は三位中将・中納言・衛門督・大納言・大将・左大臣・太政大臣。『住』は三位中将・右大将中納言・関白。『小』は東宮・帝。『秋』は大将・関白。官職が類似という点で見る。：E

ただし、出世をするという点ではA、B、C、D、Fも含まれる。

(三一) 父の最後の官職について 『落』は大納言。『住』は大納言。『小』は大臣(関白)。『秋』は大臣。ただし先にも触れたように時代が下るに連れて官職の地位の實質的高さは低くなるので、この四作品の父の最後の官職は

類似と解釈する。∴A、B、C、D、E、F

(三二) 継母のその後について 『落』の姫君は継母を許す。後世のために功德を心掛けてほしと大層立派な作法で尼にし、継母は七十余歳まで生きる。『住』の継母は継母実子を始めとして人情のわかる人からもわからない人からも嫌われ、壊れた建物で雑草の庭となつて荒れ果てた所にむくつけ女と明かし暮らし、老衰して亡くなる。

『小』は継母の行状を見聞きした人からすつかり愛想づかしされ、惨めな生活を送る。『秋』の継母は継母実子がいなくなり、自ら京極の家を出る。姫君、継母実子は継母を許し、清水あたりに御所を建てて住まわせる。

∴CとD

(三三) 結末時の継母の感情について 『落』の継母は腹を立てた時には姫君のことを憎らしく感じ、満足している時には継子はあるがたいと思う。(自分のした事に対する反省の感情は見られない。)『住』の継母は人にあれほどの物思いをさせた報いなので泣く以外どうしようもないと思う。『小』の継母は「かくかすかなる住まひになり行くも、我が身の咎におぼえ給ふ」と後悔、反省の気持ちを抱く。『秋』の継母は「かほとくわほう、めてたき人を、うしなひつることの、浅ましきよ」と思う。∴D、E、F

(三四) 継母実子のその後について 『落』は、男君が三の君の夫、藏人少将に男君の妹の中の君を勧める。面白の駒(兵部少輔)と四の君を結婚させる。姫君は継母実子のことを気に掛け、三の君を中宮の御匣殿の別当にさせる。四の君と権帥を結婚させる。『住』は姫君が継母実子を迎え、世話をする。『小』の姫君は継母実子のかつて暮らしていた梅壺に迎え、女御のようにして宮仕えをさせる。『秋』は継母の姫君に対する仕打ちを歎き、隠れ住んでいたところを姫君に探し出される。継母実子は父の跡を継ぎ栄える。(他本には男君の弟と結婚する。)男君からの報復があるかどうかという点で見ると∴D、E、F

ただし姫君が継母実子の面倒を見たという点を見ればA、B、Cも加わる。

(三五) 結末時の父の継母に対する感情・態度について 『落』の場合、父は継母のした事や継母に対してどのよう
に感じているかを特には挙げておらず、以前同様に父は継母とともに暮らす。『住』は継母に嫌気がさし、あれ
これ言い立てて、姫君の亡き母宮の住んでいた三条堀川へ移る。男君が止めるものの父が頑なまでに継母との同
居を拒否したため、男君は叔母の対の御方という人と結婚させる。『小』の場合、父は継母の顔を見ながら暮ら
す事を恥ずかしく思い、継母が移り住んだ事を聞くが、呼び戻そうとはしない。『秋』は継母が姫君を流した事
を知らない父は、母も同じように喜んでくれたらと悲しむ。∴D

(三六) 継母の協力者について 『落』の継母に協力者はいない。『住』はむくつけ女(女房)。「小」は民部少輔
(甥)。「秋」は河原の局(女房)。∴E

ただし、協力者がいるかどうかで見るとD、Fも含まれる。

(三七) 姫君の協力者について 『落』は阿漕(女房)。「住」は侍従(女房)、住吉の尼。「小」は小侍従、右近(女
房)、民部少輔の妻。「秋」は秋月の尼。女房を協力者にしていた点で判断する。∴A、B、D

尼を協力者にしていた点ではE

協力者がいたかどうかという点で判断するとC、Fも含まれる。

(三八) 姫君の協力者のその後について 『落』の阿漕は内侍司の典侍になり、二百歳まで生きる。「住」は内侍と
なり、まわりの誰からも羨まれる。「小」の小侍従は掌侍となる。右近は中納言の君と呼ばれる。二人ともいい
ことずくめ。民部少輔の妻は身に過ぎた寵遇を受ける。「秋」の秋月の尼は繁栄する。姫君の協力者が幸せになっ
たということと判断する。∴A、B、C、D、E、F

二、考 察

前章の比較考察（一）（三八）をもとに、考察を行う。

A … 十九
B … 十四
C … 十五
D … 二十七
E … 三十
F … 二十三

秋	小	住	落	
15	14	19		落
30	27		19	住
23		27	14	小
	23	30	15	秋
68	64	76	48	総計

パターン印を数えると右上のような集計結果になる。これにより、四作品の中で『住吉物語』と『秋月物語』が一番類似していると言える。右下の表の総計により、他の三作品に最も類似度の低い継子譚は『落窪物語』であり、反対に最も類似度の高い作品は『住吉物語』であることがわかる。

（一）四作品の共通点

四作品の共通点は、姫君（主人公）の父の地位の高さである。また、姫君は、みすばらしい法師や身分の低い男との結婚話や噂話を継母に立てられ、隔離、または流離された後、すなわち苦難の後、男君の許に引き取られる。ただし、四作品は様々な継子いじめがあり、その度合いは異なる。『落窪物語』は同じ京内の話ではあるが、姫君が隔離された場所が、変な匂いのする物置のような部屋ということで、華やかな京からは程遠い異空間^{（注5）}に姫君は移り、男君は姫君を助けるためにその異空間へと出かける。その他の三作品は住吉や山里、秋月といった京から離れた所へ出かけ、救出した後に姫君は男君の許へ引き取られる。

男君は、姫君以外の女性との縁談が持ち上がるものの、結末時には姫君の他に妻を持たない。当時は一夫多妻制が当たり前で、政治の中心にいる男性ならば、なおさら多くの女性を持つことになっても不思議はない中で、継子譚は一夫一妻制をとる。結婚した女性で、しかも夫が有力者ならば、夫の浮気が当然のように付きまといてくるはずが、姫君はそのようなものから縁遠く、女性達からの憧れの立場に立ち、幸せな結婚生活を送る。

姫君が男女の子を産み、女の子は女御になる。女御になるということは、姫君の娘が将来、御子を産み、その子が帝となれば姫君の娘は国母になる。女性の地位としてはこの上ない出世を姫君の娘が遂げる可能性がある。そして、男の子は四作品とも出世街道を走り、昇進をする^{（注10）}。姫君の血縁者が男女両方の世界で最も出世を果たす可能性を含んでいる。姫君は継母が嫌がっていた姫君の出世を単独で成し遂げるのではなく、子の世代でさらに孫の世代へと一族として繁栄していくのである。

救出後の姫君は継母実子の世話をし、姫君に協力した者は人が羨むほどの幸せを手にする。

これらのことから四作品とも、継母から迫害を受け、つらい立場を経験した姫君が男君の許に引き取られた後、当時のほとんどの女性なら苦しんだであろう嫉妬心^{（注11）}とは無縁のまま一族として栄え、継母を除いた周囲の人（父・継母

実子・姫君の協力者)を含めて幸福になる。つまり、誰よりも苦しんだ姫君が誰よりも幸せになるであろう明るい未来を暗示したまま大団円を迎える。

(二)『落窪物語』の独自性

『落窪物語』の独自性は、継母のみでなく父までも姫君に関心を示さず、姫君の味方にならないことである。男性の継母実子を除き、女性の継母実子は姫君に嫌悪感を抱き、同じ父の娘として見ない。姫君は、姫君付きの女童(のち女房)の阿漕を除けば、父邸ではたった一人きりで耐える。そして男君という唯一の味方が姫君を守り、徹底的に報復攻撃をする。父邸で身を守る立場だった姫君は、男君の許に引き取られることで、姫君自身が何もしなくても攻撃側に移る。攻守の逆転が顕著だと言える。『落窪物語』の継母に協力者はおらず、姫君が男君の許へ引き取られるまでの姫君の動向の決定権は、父ではなく継母が握っている。そして、継母は姫君の屏風を始めとした調度品や鏡箱・櫛箱を自分の物にし、面白の駒からの贈り物を姫君の娘に差し上げようという四の君の提案を「をかしき物にこそあめれ。なほ持たまへれ」と結末時まで物質に執着する。三作品にこのような面はない。最後の最後まで反省を見せない継母は悪役に徹しきっている。たった一人の、一貫した悪役だからこそ、三作品に比べ継母の印象は強い。また、『落窪物語』の継母のみ男女の子を産み、その子どもの男女数は姫君の産んだ子の男女数に一致する。継母と姫君は母として同等になるが、その子の出世には差が大きく開いている。善悪、明暗の差がはっきりしている。その他の三作品は父が姫君を守り、男君の許に引き取られても、報復という行動はなく、自然に継母は落ちぶれていく。(その後救われるかどうかは別にして)

他の三作品に見られる自然な零落が示すことは因果応報という宗教的な要素を持つという事である。神仏の加護や尼の活躍も、この事を示している。『落窪物語』にそのような面は見られない。

さらに付け加えて、物語の結末を見てみる。

・『住吉物語』は

昔も今も、長谷の観音は験あらたにおはします。末遥々と榮え、心あらむ人はよくよく見給へ。わろき人は、目の前に消え失するなり。心あらむ人は見ても偲び給へとて、書き付け侍るなり。

・『小夜衣』は

かまへて、人のためには、なさけあるべき事、と見えたり。腹黒・和讒もちたる人は、末までも、この世も後の世も、いかでかよるべき。継母、あさましき有様、思ひやるべし。

・『秋月物語』は

されはにや、たとへにも、あたをは、恩にて報するといふこと、是也、何事もく、そのむくひ、やかて、車の輪のことしと、見えたり

とあるように、各々の物語は作品を通して因果応報の理を論し、善への道を勧めている。『落窪物語』は「典侍は二百まで生ける」とかや」とただハッピーエンドを誇張して終わるが、作者が読者に教えを論するような事はしない。『落窪物語』の作者が登場する時は、読者の感情を増幅させるような語り掛けか、独り言のようにつぶやくのみで、宗教的な説教を持ち合わせない。この事でも『落窪物語』の宗教性の薄さは窺える。

最後に、先の集計数で『落窪物語』と他の三作品の類似数が十四・十九と、『落窪物語』はそれほど独自性の強い

作品ではないように受け取れそうだが、四作品共通点は十二項目あり、類似数のほとんどが四作品共通点である。三作品は『落窪物語』に独自に似ているのではなく、継子譚としての一つの形の中で類似していたにすぎない。四作品共通点を除くと二・三項目しか似ていない『小夜衣』・『秋月物語』は『落窪物語』の影響をあまり受けていないことがわかる。継子譚として平安時代に『落窪物語』・『住吉物語』^(注12)が書かれているが、鎌倉時代、室町時代と時代が下っていく中で、『落窪物語』の存在が薄れ、当時の人々の間で継子譚というと『住吉物語』の型が主流になっていたことが窺える。

『秋月物語』の他に『伏屋物語』も『住吉物語』の系列に入れることが出来るが、このように『住吉物語』が時代を超えて存在感を持ち続けたのに対して、なぜ『落窪物語』は持ち得なかったのか、という疑問が浮かんできく。

今の私には、その理由を学問的に解明するだけの知識も能力もないが、ただ想像できる一つの理由として、『落窪物語』における叙述の露骨さ(継母へのしつこいまでの仕返しも含め)が品格に欠けるものとして、平安後期から室町期に至る物語読者(主として上流階級の姫君とその女房)に迎えられなかったからではなからうかと思うのである。

注

(1)『新編日本古典文学全集 枕草子』校注・訳者松尾聡・永井和子(小学館 一九九七年一月二〇日発行)二七四段「成信の中将は」に、「交野の少將もどきたる落窪の少將などはをかし。……足洗ひたるぞ、にくき。きたなかりけむ。」とある。

(2)『新編日本古典文学全集 源氏物語②』校注・訳者阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(小学館 一九九五年一月十日発行)

による。

- (3) 『日本古典文学全集 落窪物語 堤中納言物語』（小学館 一九九五年一月十日発行）。落窪物語の本文には極端な異本はない。
- (4) 『中世王朝物語全集 零ににころ 住吉物語』（笠間書院 一九九五年一〇月二九日発行）。住吉物語の本文は多くの異本があるが、千種本系の甲南女子大本を採用した右記書に依り、武山隆昭著『住吉物語の基礎的研究』（勉誠社）所収の三系統の校本を参照した。
- (5) 『中世王朝物語全集 小夜衣』（笠間書院 一九九七年二月二六日発行）に依ったが、名古屋国文学研究会編『小夜衣全釈』（風間書房 一九九九年三月一五日発行）を参考にした。
- (6) 『秋月物語』の本文は、『室町時代物語大成 第二』（角川書店 一九七三年二月二〇日発行）所収、高山歎喜寺本による。他に写本・版本もあるが、最も分量の多い「広本」である本書に依った。
- (7) 『新訂増補國史大系 公卿補任』より、天元三年（九八〇）～長保二年（一〇〇〇）の大納言の平均人数は四人、中納言の平均人数は六人。元亨三年（一三三三）～康永二年（一三四三）の大納言の平均人数は十人、中納言の平均人数は十三人。文安二年（一四四四）～寛政五年（一四六四）の大納言の平均人数は十二人、中納言の平均人数は十三人である。平均人数を対比させて判断した。なお、四作品とも成立年代がはっきりしておらず、『落窪物語』・『住吉物語』は十世紀成立ということ、この二十年にした。『小夜衣』は鎌倉後期、南北朝時代成立ということから、鎌倉幕府が滅んだ年を境に前後十年を選んだ。『秋月物語』は室町時代成立としかわからないので、室町時代の中間の年二十年を選んだ。
- (8) 高橋亨氏が『落窪物語』では、女君の部屋「落窪」そのものが、異空間と現世との境界線を示す籠りの時空」（『話型』継子譚の構造）『国文学』解釈と教材の研究』第三十六巻十号 平成三年九月号）だと述べられており、落窪よりもひどい雑舎を都とかけ離れた異空間と捉えたい。
- (9) 吉海直人氏が『櫛の箱』は常に姫君の傍に置かれていた。両者は一見何の機能もしていないようであるが、実は姫君の傍にあると書かれることにより、物語の深層において姫君を守護しているのである。」（『住吉物語』の琴をめぐる）『國學院雜誌』第八十三巻七号、昭和五十七年七月十五日発行）と述べられているが、『落窪物語』に神仏の加護がないとしたのは、吉海氏のように深層部分まで含まないからである。

(10) 『落窪物語』は太郎と二郎が大将になっている。大将は『源氏物語』で夕霧が大納言と兼任しており、歴史の上では藤原師輔が大納言と兼任している。大臣で大将を兼任している歴史上の人物も多く見られる事から、大将は顯職と言える。『住吉物語』は三位中将となる。本来中将は四位に相当するが、三位にのぼるのは大臣の子や孫に限られた特別対偶なので、出世することが予測される。『小夜衣』は春宮になる。『秋月物語』は殿上人の中でも優れ、帝の覚えもすばらしいとあるので出世は予測されるため、本稿のような表現にした。

(11) 『蜻蛉日記』からも窺える。

(12) 本稿では、現存『住吉物語』を、鎌倉時代の改作ではなく、平安時代の祖本との間に根本的改変はなかったとする稲賀敬二・武山隆昭説に従った。

(H13・8・16稿)